

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第 8 条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名 (姓, 名)	フィットリアナ プスピタ デウィ Fitriana Puspita Dewi	授与番号 甲 1552 号
学位の種類	博士(文学)	授与年月日 2022 年 3 月 31 日
学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項該当者 [学位規則第 4 条第 1 項]	
博士論文の題名	戦時中インドネシアに派遣された日本女性作家文学論-林芙美子を中心に	
審査委員	(主査) 瀧本 和成 (立命館大学文学部教授)	田口道昭 (立命館大学文学部教授)
	橋本 正志 (別府大学文学部准教授)	
論文内容の要旨	<p>本論文は、序章と終章および本論一部四章、二部二章（全六章）で構成されている。各章は以下の通りである。</p> <p>第一部 第一章 林芙美子のインドネシア紀行文の研究—「赤道の下」、「南の田園」、「スマトラ—西風の島」 第二章 林芙美子の「古い風新しい風」論-ボルネオの表象をめぐって 第三章 林芙美子「ボルネオダイヤ」論-多面体としてのボルネオ 第四章 林芙美子「荒野の虹」論-スマトラからの復員兵をめぐって</p> <p>第二部 第一章 小山いと子『椰子真珠』論-スマトラにおける多言語状況をめぐって 第二章 佐多稲子「挿話」論-音によるスマトラの描写</p> <p>本論考は、1942 年から 1944 年にかけて陸軍報道部による「南方視察」命令によって「南方」に派遣され、インドネシアの諸地域を旅した経験を持つ林芙美子、小山いと子、佐多稲子の文学作品を研究対象としたものである。</p> <p>第一部は、林芙美子を中心に、ボルネオ、ジャワ、スマトラというインドネシアの三地域を舞台にした戦中・戦後の作品を考察している。第二部は、林芙美子と共にインドネシアに同行した小山いと子と佐多稲子の各作品を分析している。</p> <p>第一部第一章は、戦時中林芙美子が執筆した紀行文「赤道の下」、「南の田園」、「スマトラ—西風の島」を取り上げ論述している。インドネシアに於ける各地方（・地域）の特色、当地における作家の戦争協力の実態および軍政の方針を現地で発掘した資料等から検討し、当時林芙美子の置かれていた状況や立場を勘案しながら作品一つひとつを丁寧に分析し、インドネシアに対する眼差しや文学観について考察を加え、文学作品にみられる戦中と戦後の連続性・非連続性を緻密に解析している。</p> <p>第二・三・四章にかけては、林芙美子が戦後に執筆した複数の作品に着目し、作品の主題および作者の意図に迫っている。第二章は、小説「古い風新しい風」を取り上げ、滞在中のボ</p>	

	<p>ルネオ表象の緻密な分析・考察によって作者の構想と作品との関係性を解き、その揺らぎ(相違点)を緻密に考察している。とくに出発前の「想像されたボルネオ」、到着後の「現実のボルネオ」、帰国後の「思い出のボルネオ」の描写の異なる点に着目し、区分した三視点から解析し、「想像されたボルネオ」は英国作家アグネス・キース『ボルネオ：風下の国』の受容性から内面化されたものであることが解明できている。第三章は、ボルネオを舞台に描かれている小説「ボルネオダイヤ」を対象とし、南ボルネオのダイヤモンド鉱業で採掘された一粒のダイヤモンドを軸にボルネオに於ける日本植民地の多面的な現実を解読している。第四章は、小説「荒野の虹」を対象に、戦後スマトラから帰還した復員兵の自己喪失から自己発見までの過程のなかで描出される感情の起伏を細緻に読み取っている。</p> <p>第二部第一章は、小山いと子の『椰子真珠』を対象に、戦時下でのスマトラの多言語状況を巡る旧宗主国と新宗主国の間の言語「戦争」を資料を提示しながら実証的に分析している。第二章は、佐多稲子の「挿話」を対象に、スマトラ農園のサウンドスケープ(音風景)による主人公の心理の変化とスマトラに対する知覚の過程を考察している。終章では、これまで考察した作家・作品分析を踏まえ、日本帝国主義下での女性作家の位置づけとその評価を巡って論述している。</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl;">論文審査の結果の要旨</p>	<p>審査には、主査瀧本和成、副査田口道昭、橋本正志の三名が当たった。</p> <p>本論考は、林芙美子、小山いとこ、佐多稲子らの南洋体験が文学作品にどのように影響を与えたかをインドネシアを舞台とする作品を分析・考察することで解明しようとしたところに特徴がある。従来の先行研究や発掘された資料を精査し、その問題点を指摘したうえで、上記に示された作品一つひとつを緻密に分析、解読し、作品主題及び作者の意図に迫っている。また、派遣された女性作家たちの現地での生活にも着目し、その体験からくる影響も視野に入れて論究している。</p> <p>具体的に示すと、本論文の成果は五点ある。第一は、全集未収録作品および新資料を発掘し、分析・考察した点にある。第二に、これまで「南方」という形で一括りに捉えていた先行研究を批判摂取し、インドネシアを舞台とした作品に焦点を絞り、他の国・地域との差に着目しながら、分析を深めたところにある。第三点として、作品の舞台や人物形象分析を通して、インドネシア滞在の持つ意味・意義を追究したことが挙げられる。派遣された女性作家たちの置かれた状況、そこからくる不安や恐怖を作品や資料を通して明らかにしたことも研究面での大きな功績となった。第四点は、日本女性作家に注目し、戦時下に於ける女性たちの視点を軸に戦争と支配の物語を支配者と被支配者、男性と女性、日本人とインドネシア人との対比のなかで相対的に読み解いた点である。さらに第五点として、現地情報・資料を駆使し、ミクロ的な視点から作品を考察することによって、従来までの南方文学研究を見直す契機となったことも、本研究の特色と言える。</p> <p>以上、公開審査とそれを踏まえた審査委員会判定会議の議論により、審査委員会は本論文が本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しい水準に達しているという判断で一致した。</p>

試験または学力確認の結果の要旨

本論文の公開審査は2022年1月8日13時00分から15時00分まで、衣笠キャンパス啓明館3階KM305号教室にて行った。学位申請者による論文要旨の説明の後、審査委員は申請者に対する口頭試問を行った。審査委員会は、公開審査において本論文の主要分野である日本文学および近代文学での研究史について、申請者の文学的事項に関わる知識、主要な研究者とその研究史的意義について試問し、それぞれについて十分な回答を得ることができた。また、本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程の在籍期間中における学会発表などの様々な研究活動の学問的意義についても質疑応答を実施した。それらを通じて申請者が博士学位に相応しい能力を有することを確認した。したがって、本学学位規程第18条第1項に基づいて、博士（文学 立命館大学）の学位を授与することが適当であると判断する。